

試し読み版

岡下誠

表紙イラスト：緋山狐

おしかけ

お姉さん



当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『おしかけお姉さん』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



おしかけ
お姉さん

岡下誠
表紙 / 緋山 狐

二次元ぷち文庫

登場人物紹介

Characters

あいざわ かすみ

相沢香澄

孝太の従姉で女子校の教師。清楚で可憐な外見をしており、外面は大和撫子で通しているが、心の底では、エッチで小悪魔ちっくな一面を隠し持っている。

みさわ こうた

三沢孝太

一人暮らしの青年。引っ込み思案でおとなしい性格。華奢な体つきで女の子のような外見をしている。

都内にあるマンシヨンの一室。

僕、三沢孝太は、ベッドの中で心地よくまどろんでいた。

僕の朝は、女子校生たちの声で始まる。

といつても、別に女子校生の妹たちと同居しているわけでもなく、ましてや女子校の寮に職員として勤めているわけでもない。

マンシヨンの裏手に女子校があるからだ。

(はふうう……。女子校生の声で目覚めるっていうのも悪くないよね……)

つい少し前までは同じ学生だった僕だけれど、卒業した今では『じょしこうせい』という言葉に魅力を感じてしまう。

(それに、今日からは……)

布団の中で僕は耳をすませた。

寝室の扉がノックされる。

「孝太くん、もう朝よ。起きなさい」

フルーツを思わせる声。

それを耳にした僕は、身体が熱くなるのを自覚した。

(お姉ちゃん……)

寝起きの生理現象で硬直していた男性器は、彼女の声を聞いてなおのこといきり立つ。

相沢香澄。あいざわかすみ

姓が違っていることからわかるように、実の姉弟ではない。従姉である。職業は教師。

このマンションの裏手にある例の名門女子校に勤めているのだ。勤務先まで徒歩一分、走れば三十秒……という抜群の立地条件を求めて、僕の部屋に押しかけてきたのである。

（夢みたいだ……。お姉ちゃんと一緒に暮らせるなんて……）

僕は、小さい頃から香澄お姉ちゃんを慕っていた。

年上のきれいなお姉さんに抱いていた憧れは、やがて熱く切ない想いへと変わってゆく。僕はお姉ちゃんに、憧れ以上の感情を抱いているのだ。

「孝太くん。聞こえているの？ 早く起きないと、遅刻しちゃうわよ」
そう言つて香澄お姉ちゃんは部屋に踏み込んできた。

意識も股間も目覚めきつている僕。

うつぶせになつて寝たふりを決め込む。

直に揺さぶり起こしてもらいたいがためだ。

「もう……孝太くんはお寝坊さんなんだから……」
かけ布団越しにお姉ちゃんの手のひらを感じる。

清楚で可憐な美貌。

艶やかで長い黒髪。

大和撫子という表現がぴったりだ。

「どうしたの？ お布団を抱え込んだじゃって」

「そ、それは……」

股間のふくらみを見られた日には、このささやかな幸福は音もなく崩れ去ってしまうだろう。

「早く起きなきやだめよ」

（起きていますっ。別のところが）

「お布団から手を離しなさい」

（お姉ちゃんがいる限り、それはできません……）

「もしかして身体の具合が悪いの？」

何の邪気もない笑顔で、香澄お姉ちゃんは小首をかしげる。

（よすぎて困っているんですっ）

「お熱かな？」

お姉ちゃんは顔を近づけてきた。

僕のおでことお姉ちゃんの額が合わさる。

「はうっ……」

たったそれだけで、本当に身体が熱く火照ってしまふ。

何しろ、息づかいが感じ取れるほどの距離なのだ。

ほのかな香りに鼻をくすぐられる。

お姉ちゃんのきれいな顔を間近にして、僕の股間はますます見せられない状態になっていた。

「少し熱があるみたいね。でも、このくらいならちゃんと起きなさい」

その口調はまさに教師のものだ。

「は、はひ。着替えたらすぐに行きますから……」

ひとりにしてください、と言外に伝える。

「あ、そうか。孝太くんも年頃の男の子だもんね」

茶目っ気のある笑みを浮かべながらお姉ちゃんは部屋を後にした。

ぎんぎんに勃起した僕を残して。

その日の夜。

香澄お姉ちゃんと一緒に夕食、という至福のひとつきを過ごした僕は、さらなる野望を抱いていた。

それは、お姉ちゃんとお風呂。

もちろん、この年齢になってそんなことをお願いできるわけがない。

ひとりきみしく(?) お風呂に入った後、僕はある大それた計画を実行に移した。

「お姉ちゃん。お風呂あきましたよ。どうぞ」

「じゃあ入らせてもらうわ。孝太くん、湯冷めしないようにね」

「は、はいっ」

返事がうわずってしまふ。

「ん? どうかしたの?」

「な、何でもありません」

逃げるようにして僕は部屋に戻った。

そして、浴室の扉が閉まるのを音で確認してから、禁断の計画を実行に移す。

足音を忍ばせて浴室に近づいた。

脱衣所の扉。

磨りガラスの向こうには人影が見える。

(お姉ちゃん……)

そのラインはこの上なく艶めかしくて、僕の胸は激しく高鳴った。ズボンの中では、力強い脈動とともに男性器が膨張する。

僕は床に這はいつくばって、脱衣所の引き戸にわずかの隙間をつくった。厚紙一枚がやっと通るほどの隙間から脱衣所の中をのぞく。

(おおっ……)

そこには下着姿のお姉ちゃんが立っていた。

まぶしいほどに白い肌。

あふれるほどの肉感美。

僕は瞬きすら忘れて凝視していた。

白いブラジャーに包まれた乳房は大きく張り出している。香澄お姉ちゃんの清楚な顔とは不釣りあいなほどに大きい。おそらく、僕の手には収まりきらないだろう。

尻肉も、むっちりとした丸みを帯びており、大人の女性の官能美に満ちていた。

飾り気のない白い下着を穿いているのだが、尻肉の魅力を抑え込むことはできていない。それどころか、官能的な曲線を浮き出させることによって、お尻の魅力をさらに引き出している。

(お姉ちゃん……すごい……)

清楚可憐な美貌と肉感美にあふれる肢体。

その対比が、お姉ちゃんの美をきわだたせている。

清らかな顔が官能的な肢体を引き立て、成熟した肉体が可憐な容貌を強調していた。

自分で自分の鼓動が聞こえる。

それほどに胸が高鳴っていた。

お姉ちゃんの下着姿を見て、僕の男性器はどうしようもないほどに強ばってしまった。

お姉ちゃんは、鏡の中の自分を見つめながら背中に手をやった。

ブラジャーのホックに指をかけ……はずす……。

（おとおおっ……）

僕の視線は胸のふくらみに集中する。

肩ひもがすべり落ち、ふくらみとカップの間に隙間ができる……。

と、そのとき。

何かを感じ取ったのだろうか。

お姉ちゃんがいきなりこちらに目をやった。

伶俐な瞳が、扉の方を射抜くように見ている。

（うわあっ）

這いつくばったまま僕は逃げ出す。

立ち上がることも忘れて、犬さながらの滑稽な姿で逃げ出したのだ。

気づかれたとしても、現場でつかまったわけではないから、後で何とでも言い逃れはで

きる……はずであった。

まさか追いかけてこないであろうと思つていたお姉ちゃんが、下着姿で追いかけてきたのだ。

「こらっ、孝太くんっ」

後ろ襟をつかまれる。

僕は、恐る恐るふり向いた。

お姉ちゃん顔は、生徒をしかるとき表情をしている。

「あ、あの……。ちよつと通りかかっただけ……。です」

「そんな言い訳が通用すると思つているの？」

「えっと……。その……」

こんなときだというのに、僕はお姉ちゃんに見とれていた。

下着姿のお姉ちゃんは神々しいくらいに美しい。

清純そうな顔と、女性らしい肉体。

その対比が僕の心を虜にする。

「そう。反省する気もないのね」

お姉ちゃんのかすかに笑みを浮かべた。

「いけない孝太くんにはお仕置きが必要ね」

表情こそ生徒を諭すときのものだが、瞳には嗜虐の光が宿っている。

お姉ちゃんは蜜汁にぬめった右手で竹細鞭を持ち、僕の男性器を軽く叩いた。まるで、女騎士が愛馬に走りをうながしているかのようなようである。

「は、はい……」

濡れ潤んだ女性器に僕は勢いよくむしゃぶりついた。

花びらの間をれるろと舐め上げ、蜜の滴る女肉穴をじゅるじゅると吸引する。餓えた獣のようにお姉ちゃんの女唇を吸い食った。

濃厚な味と香りが僕の意識を染め上げる。

めまいがするほどの女陰臭。

それは女性の生々しさを凝縮したような香りであった。

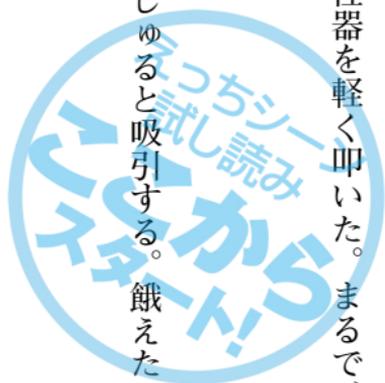
（お姉ちゃんの……匂い……。ああ……お姉ちゃんのおそこ……こんな匂いがするんだ……）

少しも不快だとは思わない。

それがお姉ちゃんの秘めやかなところの匂いだと思うと、勃起中枢を激しく刺激された。僕は夢中になって舌をつかい、はしたない濡れ音を立てながらむしゃぶり吸う。

「んああ……ああ……あん……。そ、そうよ……。お姉さんへの敬意を込めて……一生懸命にしゃぶりなさい……」

女調教師となったお姉ちゃんは、竹細鞭で僕を躡けていた。



舌づかいのリズムを示すために男性器の肉胴を叩き、僕がその指示に従うとご褒美に龟头を撫でる。

舌づかいがおろそかだと容赦なく太腿を打ちすえた。

僕の顔面に騎乗したお姉ちゃんは、お仕置きとご褒美とを巧みにつかって牡馬を調教している。

「んうう……んん……。お姉ちゃん……。お姉ちゃん……」

僕はお姉ちゃんの鞭に躓けられて、濡れ咲いた女花肉をうやうやしく舐めしやぶっていた。あがめているかのような従順さで舌を捧げ、聖なる蜜を拝受するかのようむしやぶり吸う。

「お姉ちゃんのおそこ……。おいしいです……。あそこの匂いや味……。とつてもいいです……」

うわごとのようにつぶやきながら舌と唇を蠢かせた。

膣穴に舌を差し込み、抜き差しや攪拌してご奉仕する。ぷっくりとふくらんだ女芯に口づけし、鼻を鳴らしながら強く吸引する。

ぢゆる……。ぢゆぷつ……。ちゆぶぶ……。にぢゆぢゆ……。ぢゆぶぶ……。

汁音がするほどに舐めしやぶる。

「あひっ……。あああ……。あん……。あんっ……」

香澄お姉ちゃんは歓喜に悶え、スーツをまとった肢体をよじらせていた。

半ば僕の顔に腰を下ろし、尻肉を揺すりまわしている。淫奔に尻をくねらせ、濡れそぼった女性器を僕の顔面にすりつけていた。

言うなれば、僕の顔面で自慰をしているのだ。

あるいは僕の顔面に女汁をぬり込み、マーキングを施しているかのようなようでもあった。

「んああ……あんっ……。孝太くんの舌っ……。とつてもいいわ……。初めてとは思えないくらい……。ひあっ……。ああんっ……」

お姉ちゃんがよがり悶えているのを目の当たりにして、僕は激しい昂たかぶりに見舞われる。

（お姉ちゃん……僕の舌で感じてくれているんだ……）

男性器にわたかまっている欲求不満を、お姉ちゃんの女唇にぶつけた。

咲き乱れた花びらを貪り、剥け返った女蕾を吸い上げる。

太腿のひりひりする痛みにすら牡欲を煽られ、物欲しそうにほころんだ女肉穴を舌で犯す。

「あひっ……。ひいっ……。わ、わたし……。もう……。もう……」

僕の舌づかいに合わせて、スーツ姿の肢体がびくびくと跳ねた。

「ああ……。んはああああああああ……。あ……。あ……」

ひとときわ高い啼き声とともにお姉ちゃんは歓喜の天上へと駆け上がってゆく。

荒々しく腰をうねらせて僕の顔を乗り犯し、女の喜びを極めたのだ。

尿穴が細かに収縮し、透き通った液をほとばしらせる。

ぷしっ……ぷしっ……ぷしっ……ぷしっ……ぷしっ……

男性が射精するかのように、お姉ちゃんは絶頂の潮を噴き上げていた。僕の舌奉仕で、おしっこよりも恥ずかしい放水を披露してくれたのだ。

（んあああ……あふう……。お姉ちゃんの……潮……。もっとかけて……。もっとかけてええ……）

潮を噴いてくれたことが嬉しくて、僕はひたすらに舌を蠢かせ続ける。

「あああ……」

お姉ちゃんは陶酔の顔つきでため息をつき、前のめりに突っ伏した。

太腿の間に僕の頭を挟み込み、女花肉を僕の唇に押しつけたまま。

「お姉ちゃん……」

僕は、手足を縛られていることも忘れて、崇拜の対象である女性器へ一心に唇を捧げている。

女性への服従を身体で教え込まれ、女性の象徴である秘花肉にうやうやしくお仕えしていた。

「んう……。孝太くん、お姉さんに対する礼儀作法がわかってきたようね……」

最後列の席にいる女の子に至っては、太腿同士をもじもじとこすり合わせていた。あそこのうずきをこらえきれなくなり、無意識のうちにそうしてしまったのだろう。

（あの娘は、後で下着検査の必要があるかも……）

などと考えながら僕はスーツ姿のお姉ちゃんを犯す。

「こうしてお姉ちゃんの後ろ姿を見るの、初めてだね。お姉ちゃんのお尻、むちむちしていてとっても素敵だよ」

張りのある尻肉を撫でまわし、手のひらいっぱいこねまわしてやった。

（お姉ちゃんに……もつと牝恥をかかせたい……教え子たちの前でよがり乱れさせたい）

僕はさらなる牡欲に駆られる。

左手をお姉ちゃんの下腹部にすべり込ませ、押し広げられた女陰門をまさぐった。最も感じやすい蕾を、指先で執拗に揉みこねてやる。

「ああ……あひっ……あひんっ……。そ、そこは……だめえ……ひっ、ひい……」

はばかりることのないよがり声が教室中に響き渡った。

官能美に恵まれた女体は僕の指弄に合わせてくねり、男性器の打ち込みに合わせて跳ね悶える。

女蕾をもてあそばされる快感。

女陰穴をえぐり上げられる愉悅。

二つの感覚が響きあい、めくるめく快楽となっていた。

女生徒たちが見ているにもかかわらず、お姉ちゃんは女体の芯から歡喜に悶えている。

「ねえ、お姉ちゃん。僕のちんぼ、気持ちいい？」

指先の蠢きで女芯を翻弄し、男性器の打ち込みで女肉穴を責め抜く。

淫ら蜜のあふれる肉穴を押し広げ、ぷつくりとふくらんだ女芯を揉みこねつつ、お姉ちゃんに恥辱の告白を強いた。

「き……気持ちいいわけなんて……ないでしょ……んあぁっ……あんっ……ああんっ……」

言葉では否定しているが、半開きになった唇からもれているのは明らかによがり声だ。

「生徒の前で嘘をつくのはよくないんじゃないかな」

女芯をきゅつと摘み上げ、やや手荒に揉みこねてやる。

「あひっ……ひいいいっ……。摘まないでっ……。お豆、摘まないでええ……」

感じやすい蕾から過大な快楽が流れ込み、お姉ちゃんは激しく身をよじらせた。

「お姉ちゃんのおそこ、物欲しそうに蠢いて、僕のちんぼに吸いついてくるよ」

女生徒たちに聞かせるかのように、あそこの具合を品評する。

「い、いや……。生徒の前で……そんなこと……」

恥じらいに灼かれているお姉ちゃんを、僕はさらに言葉責めした。

「ちんぽをくわえ込んで、あそこが嬉し泣きしているね。お汁の涙があふれているよ」

「そ、それは……んああ……あひっ……あんっ……」

女肉壺は熱い蜜に満ちており、男性器を打ち込むたびに発情汁があふれる。

さながら、女陰が嬉し泣きしているかのようだ。

最前列に座っている女生徒は、太腿に伝い落ちる蜜汁を見ることができらるだろう。

「それとも、こうすればもつと素直になつてくれるかな……？」

左手の親指を尻肉の合わせ目にもぐり込ませる。谷底に息づく小さなすぼまりに指腹をあてがい、ねちねちと揉みまわしてやった。

「ひっ、ひいひいっ、んひいひいっ……。お尻、お尻から……。指……。どけなさい……」

お姉ちゃんは、ひいひいよがり啼きながらも女教師としての威厳を保とうとしている。だが、教師と肉教材との立場は逆転していた。

「お姉ちゃんみたいに強気な女性を、男はとことんまではずかしめたくなるんだよね……」
嬉し泣きしている女陰穴を男性器でかきまわしつつ、しわの一本一本を伸ばすかのよう
な執拗さで尻穴をまさぐる。

お姉ちゃんにはずかしめを与えるとともに、強気な女性を屈服させたいという男の心理を女生徒たちに示してやった。

「ひいっ、あひっ、ひあああっ……。許して……。お尻の穴、許してええ……」
生徒を前にして許しを乞うまになつたお姉ちゃんを、僕は獣欲のままに責め^{なぶ}廻る。

「お姉ちゃんが素直にならなかつた罰だよ」

左手の親指を尻穴に打ち込んでやった。

ぬぶぶぶっ……。

ある意味では女陰よりも恥ずかしい排泄器官を親指で征服する。

「んひっ、んひいひいひいひい……」

お姉ちゃんは憑かれたように尻肉をうねり舞わせた。激しく身をもがさせることによつて、尻穴に打ち込まれている指を抜こうとしているのだろう。

しかし、女陰穴を貫通している男性器が肉の杭となり、お姉ちゃんの腰をがっちり固定している。

腰をうねらせればうねらせるほど女陰に秘粘膜をこすりまわされ、快楽を味わわれるのだ。

「んあああ……あひっ……ああん……。ゆ、指……抜いて……。抜いてください……」

お尻の穴に親指を打ち込まれ、お姉ちゃんは息も絶え絶えに喘いでいる。

「いいよ。抜いてあげる」

僕は、尻穴の締めつけを堪能しつつ、ゆっくりと親指を引き抜いた。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>